

【鉄道唱歌】（明治三十三年五月）

地理教育鉄道唱歌 東海道編（一番のみ）

♪ 汽笛一声 新橋を はやわが汽車は 離れたり 愛宕の山に入り残る 月を旅路の 友として ♪

【身延線鉄道唱歌】

作詞 小澤 肇

推敲協力 身延線鉄道唱歌の会（作曲 多梅稚）

- 一 汽笛一声富士駅を我が乗る列車離れたり 三十九駅 九十 軒普通列車の旅とせん
- 二 柚木堅堀入山瀬近代製紙のおきたとこ 三大仇討ち一つなる曾我兄弟の寺社もあり
- 三 右に霊峰仰ぎつつ 富士根にたなびく雲の帯 富士宮は登山口 浅間大社に湧き水に
- 四 西富士過ぎれば左に見える 安居山あたりの海の砂 川もないのに沼久保で しばらく富士山さようなら
- 五 三大急流富士川に沿って行きます芝川 筒梅の産地なり 水やみどりに富める町
- 六 戦国武将信長公首塚西山本門寺平家の若武者維盛のお墓が稲子の奥にあり
- 七 稲子で駿河を後にして 甲州十島良いところ 昔は身延路御番所で 今は電車で自動車で
- 八 井出ては寄畑内船へ 南部の火祭り空焦がす 奥州南部の祖の地なり 威風は今に伝えらる
- 九 身延の駅に降り立ちて 日蓮宗の総本山五重塔の再建に 枝垂桜木花添える
- 十 信玄公の隠し湯の 下部で疲れ癒されん 湯の奥甲州金山は 武田氏支えた軍資金
- 十一 全国各地に木像を 遺せし木喰上人の生まれは一ノ瀬微笑館 山の上でも人絶えず
- 十二 つづけて久那土甲斐岩間 印章で名高き里にして 向いの西島和紙づくり 書家の望み 叶う町
- 十三 視界が開けて 鵜沢 舟運の名残り今は無く 敷かれし鉄路に拠るところ 甲駿交流夜明けなり
- 十四 市川大門は花火まち 知恵の文殊は甲斐上野 團十郎の出たところ ゆめゆめ共々忘れなん
- 十五 笛吹川を打ち渡り 見よや果樹やら野菜やら 果樹王国と謳われる 甲府盆地の花輪なる
- 十六 四方の山に目をやれば 雲突く山脈いや高く 老樹の深き善光寺 石和の湯けむり指呼の間
- 十七 終点甲府は 中央線 乗り継ぐ人も数多く 躑躅ヶ崎の夢のあと 武田の遺跡守れかし
- 一八 時は人を替えれども 山梨静岡両県の 明るく平和な郷づくり 身延線と共に栄えあれ

身延線と共に栄えあれ